異文化と心通わせ ⑥3

村田　佳子

まもなく鶴岡の七日町のおかんのさん（観音堂）のだるま市が開催されるころかと思います。あの通りは私にとって高校への通学路でもあり、13年間通っていた鶴岡市民プールへの道でもありました。高校1年の冬、その鶴岡市民プールが老朽化に伴って工事することになり、市内のスポーツクラブをお借りして練習した時期があります。

あのおかんのさんの辺りを歩くときは、まだ月が出ている朝4時半ごろで、当時は街にコンビニエンスストアなどもなく、月と電柱の明かりだけが雪を照らしていて冬の朝は意外に明るいことを知りました。除雪車を運転するおじさんとどこですれ違うかでだいたいの時間が分かったものです。なぜか誰も歩いていないところを歩きたがるのは子供だったせいでしょうか。

新雪を踏む自分の足音とアノラックがこすれる「カサッ、カサッ」という音だけを聞きながら歩くのは、未明の特別な時間を限られた人たちだけで共有しているような優越感がありました。人と人が街ですれ違っても声を掛け合わないのに、山登りで行きかう人たちがあいさつを交わすのはそんな特別な気持ちを共有しているせいからなのかもしれません。

アノラックって何？

東京もだいぶ気温が下がってきたので先日「去年買ったアノラック出しておいたよ」と夫に伝えたものの、「アノラック」という言葉が通じませんでした。そういえば夫だけではなく、職場でも友人たちの間でもこの言葉を使う人がいません。「アノラックって何？」。そう問われたら皆さんなら、どう説明するでしょうか。アノラックを何かの道具だと思う人、「それってコートでしょ？」とか「ジャケットのこと？」、帽子がついているといえば「パーカ？」と言われ、自分だけ分かっている言葉を理解してもらうということはもどかしく、なかなか通じなかったのを覚えています。「アノラック、着ていきなさい」が通じたのはわが家だけだったのでしょうか…。

「幼稚園に行くときは毛皮を着て行ってたよ」。子供のころ、冬に何を着て出かけていたのかと夫に問うと、こんな答えが返ってきました。毛皮と聞くと（え？セレブ？）と一瞬思ってしまいますが、おしゃれで着ていたのではなく「必要に迫られて」でした。

1970年代、マイナス40度という場所で暮らすには毛皮は必需品だったようです。夫は父親の仕事の関係で幼少期、カナダのエドモントンという時期があります。冬のオリンピックで有名なカルガリーからさらに北へ300キロ、もともと石油ラッシュで栄えた街だそうです。当時も石油が手に入りやすかったのか、どこへ行っても暖房設備は充実していて、たとえ外がマイナス40度まで気温が下がっても、家や学校はポカポカと温かかったと話します。下着は綿のものでは不十分で、一つ間違うと凍傷になってしまうためアクリルのものを着せられたと振り返ります。そしてモコモコと着込んでフードをかぶり顔だけ出して目的地まで急ぐ。

よくイヌイットと呼ばれる現地の人が親しい人との挨拶に鼻と鼻をこすり合わせると聞いたことがありますが、たくさん着込んでいて抱き合うことも握手することもできないとしたら、外に出ている部分、「鼻」が全身を代表して相手に触れ親交を確かめ合ったというのは納得できます。今でこそ温かくて軽い羽毛のダウンジャケットがありますが、当時一番手に入りやすかったのは何の動物かは定かではないけれど、防寒具は毛皮でできていて、子供も大人もそれで寒さをしのいでいたといいます。

この記事を書きながら「アノラック」という言葉をあらためて辞書で調べてみてわかったことがありました。『アノラックとはもともとイヌイットの毛皮製の防寒上着。登山、スキー用の頭巾付き防寒・暴風雨上着』。夫が幼少期に着ていたものはアノラックそのものだったんじゃないかということです。

（鶴岡市出身、コーチングシステムズ）